

大 垣 — 神 戸

(東 海 道 線 その 3)

水の都大垣を出た列車は 紡績工場の間を縫って やがて町はずれの小さな鉄橋を渡る。右手にみえる低い山のすそはいたるところで切崩され 白い石灰石が陽光を浴びている。これが大理石の産地「赤坂」山の名も金生山という。

その赤坂への分岐線を右に見て やがて列車は大きなカーブを描いて 金生山の山すそにせまる。この大理石は 紅縞 霞紋 白縞 更紗 などと銘を打たれて 全国各地に石材として利用されているのは周知の通り。しかしこれが 2億年以上もむかしの 海百合 紡錘虫 珊瑚 巻介 などの見事な化石をふんだんに蔵しているとは知る人ぞ知る。

大理石の山から列車は なおも古生層の山に沿ってしだいに登って行く。左手に見える急斜面をもった山は濃尾平野の西を境する鈴鹿山脈の北端。かつて大垣から蒸気機関車2台で引き上げた扇状地の急勾配も 新垂

井経由の迂廻路と電化の力で楽々と登り切れる。峠近くの湿度を求めて その昔できた紡績工場が今なお山間に水を求めて操業している。関ヶ原の古戦場不破の関跡 岐阜と滋賀の県境 そしてここで正真正銘の西日本へ入る。

下り勾配で勢のついた列車は 再び左に大きくカーブしてほどなく 見上げるばかりの伊吹山があらわれる。上半分は石灰岩 下半分が珪岩と粘板岩 その時代は双方同じであるが 堆積した場所が違うという。すなわち中生代の地殻運動で 石灰岩が珪岩や粘板岩の上のし上げてできたものであるという。石灰山のならわしによって ふもとは石灰工場とセメント工場 それに豊富な湧泉の群がある。

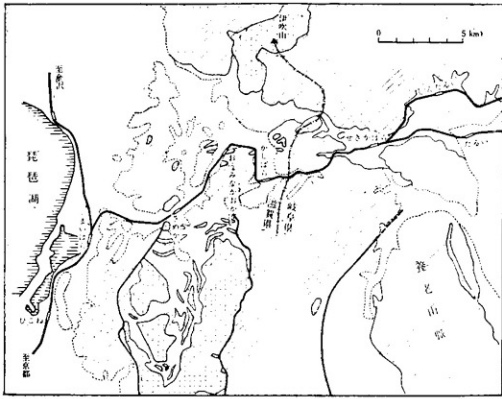
おおみながおか 駅で車窓間近かに石灰岩の採掘場をながめ 石灰岩から湧き出る湧泉で鱒の養殖を行っている醒ヶ井 それから右の車窓にその湧泉の水を受けた清流沿いに やがて列車は珪岩の切り割りをぬけて北陸本線との分岐点 まいばら にすべり込む。



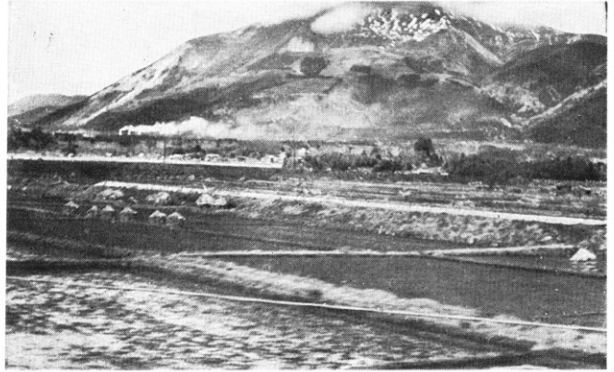
下り線新垂井の手前からはるかに濃尾の平野をのぞむ 左は大垣の上場群で両側に山のせばまりが感じられる



赤坂の石灰山と白く化粧された石灰工場



関ヶ原の前後
 古生層の地 古生層 石英斑岩



車窓を圧する伊吹山
 白煙は大坂繁業のセメント工場

右手に琵琶湖の湖岸につづく豊かな水田と その向うはらかに比良の連峯をのぞむうちに 田園に替るいらかの波と それを見守る彦根の城。

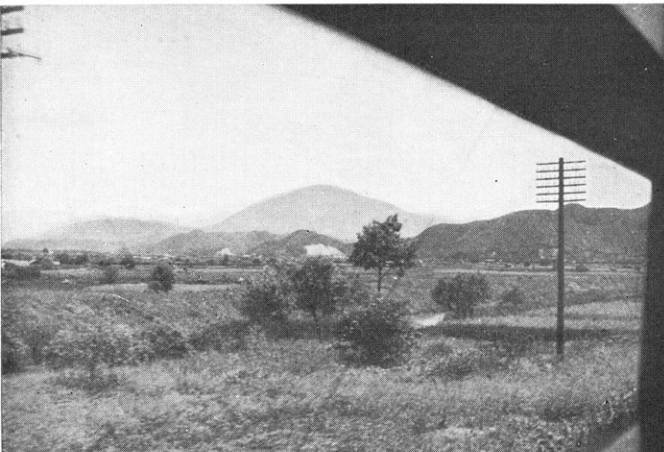
ここから先は 古生層の山がしだいに遠のいて ひたすら水田のつづく近江盆地の中心をはしる。 左の車窓遠く鈴鹿山脈の山頂部が見える カルスト地形の石灰岩台地。 さっきみた伊吹山と同じでき方の霊仙山 河瀬稲枝 能登川を過ぎて安土に近く ようやく水田の中にあたかも島のように 石英斑岩の山が点在し その山かげに輝く水面は 琵琶湖の内湖の一つ。

近江八幡 篠原を過ぎて 野洲のあたり 左側のピラミット型をした山が 三上山でまたの名を近江富士と呼ばれる。 地質学では単にホルンフェルスの小山に過ぎないが 山ろくを7巻き半巻いたという大むかでと そ

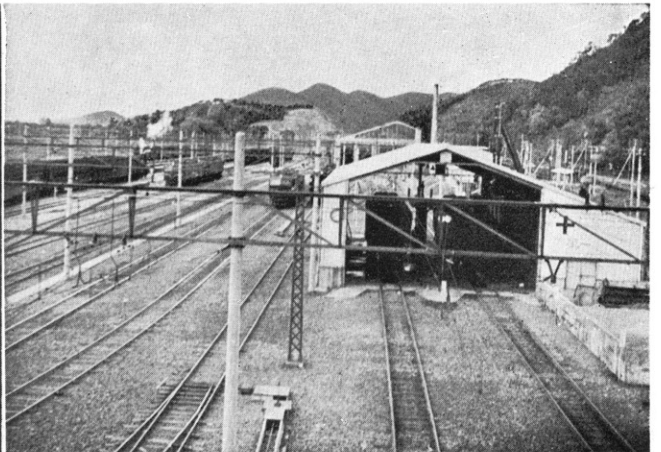
れを退治したという俵藤太の昔話は この小山を少しはほんものの富士山に近づけるに役立つだろう。

野洲からほどなく列車は 水のない砂利ばかりの川原にかかった長い鉄橋を渡る。

さて このあたりで話を少しばかり昔に戻そう。 さきほどまで 飽きるほど御覧になった田んぼのかわりに水面をもつてくると 見渡すばかりの広い湖があらわれところどころに小島が ちょうど湖北の竹生島や沖の島のように 浮かぶ景色が描き出される。 この姿は今から1万年以上も前の洪積世の終りころのことで やがて鈴鹿山脈から愛知川 日野川 野洲川などの流れとともに運ばれてきた土砂が 次第に水面をせばめ やがて広い肥沃な平野を作り出したのである。 いま鉄橋の下に見える砂礫は こうして しつように琵琶湖を埋め立てている自然の生々しい断面とみることができる。



まえばら駅の手前伊吹山をふり返る



米原橋からのぞんだ電化の完成した米原操車場 右側の山は珪岩 中央の丘陵は蛇紋岩 少し左方に珪岩でできた給水塔のある小丘がある



能登川付近から比良連峰を望む
左側の丘の手前 琵琶湖の内湖がみえる



おおつ駅からみた比良連峰その
前に古琵琶湖層の台地が見える

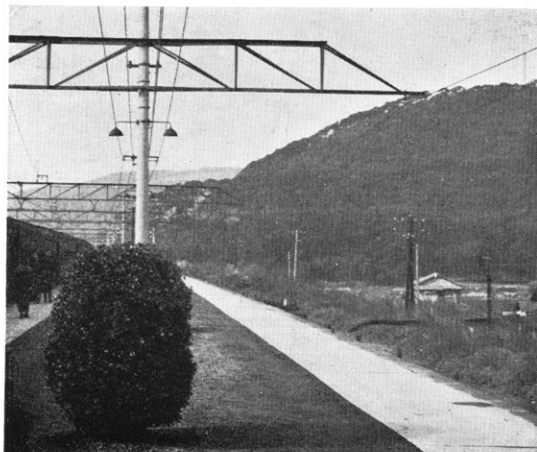
守山を過ぎて国道東海道沿い草津線を合わせるところがくさつ駅 すなわち 東海道と中仙道との分岐点ここでそのむかし旅人が姥が餅を喰べ 2日さきに現われる京の眺めに胸をおどらせたというところ。

列車は次いで短いトンネルに入る。このトンネルの上を水が流れている。南方にひろがる花崗岩の山地から押し流された砂が しいだいに川床をせり上げてできた天井川の下をくぐり抜けるのである。次いでもう一つの窓外に天井川がのぞまれる。

車窓は 右手に比えい山を 左手に田の上山の花崗岩の桃色の地はだと 古琵琶湖層でできた台地を眺めながら 瀬田の鉄橋へ近づくと 琵琶湖の豊富な水を利用する東洋レーヨンの工場群 石山寺 瀬田の唐橋 粟津が原 琵琶湖をへだてて矢橋の村 近江富士そして北方はるかに比良の連峰 こうして多彩な車窓の移り変りをよそに やがて列車はおおつの駅へ着いてしまう。

おおつ 駅 近く車窓から琵琶湖を眺める好適な地点がある。琵琶湖は世にいう富士山がとび出した替りにくぼんでできたというようなものではない。第三紀から洪積世にかけてのころ 鈴鹿・比えい・比良の山脈が隆起したのと逆に 間にはさまれた部分が低くなってできたのが近江盆地であり その深い部分に水がたまったのが琵琶湖にほかならない。したがって その湖底に堆積した地層が古琵琶湖層であり 比えい・比良の山脈と盆地との境界は 断層線崖といって急斜面が一直線に長く続いているのが目立っている。

おおつ 駅 を発車して間もなく 列車は逢坂山のトンネルに入る。間の中を走ること2分余りで山科の盆地。右手にすでに窓よりも高くなった疏水ばたの桜並木 花山天文台のドームを見て再び東山のトンネル。そして眼前が開けた所はすでに京都市街地の中央に近い。間もなくきようと駅。



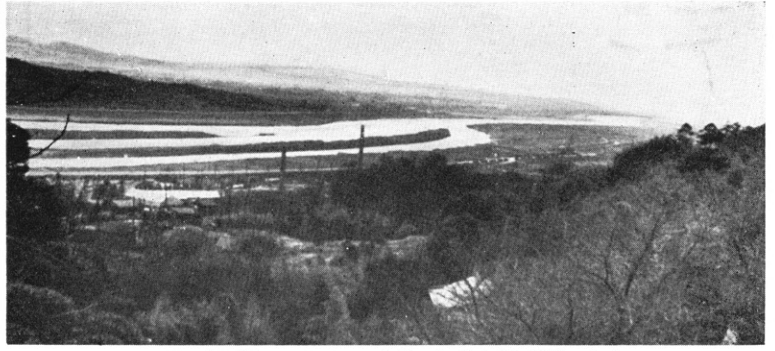
やましな駅からみた琵琶湖第一疏水と花山天文台



比えい山(中央)大文字山(右端)と京都市街



桂川の布さらし



桂（手前）・宇治・木津（一番向う）3川の合流
淀川合流点（手前の煙突は大日本紡績山崎工場）

丹波高原のながながと連なる山々の南 東山三十六
峯と西山の山地とはさまれた千年の都 京都。 整然
と区画された町並みに神社・仏閣・五重塔・箱庭のよう
な風景も車窓展望ではちと物足りない。

きようと駅を発車して 桂川の鉄橋 向日町 神足^{こうたり}
あたり右手に丹波の竹林におおわれた古生層の西山山
地。 その前面に洪積層の台地がせまる。 左手にはか
って京都盆地一帯が湖であったという頃の名残りをとど
める 巨椋池^{おぐら}の干拓。 そのかなたに茶畑におおわれた
宇治の洪積台地がのぞまれよう。

きようと駅 から15分 山崎のあたりが京都・大阪
両府境で2つの府の境界は日本でここだけという所。 こ
こはまた京都盆地と大阪平野との境目。 左手男山と右手
天王山にはさまったところで 桂川 宇治川 木津川が相
次いで合流し。 ここに40kmの天下の大河 淀川の水が
流れ出すのである。 枚方^{ひらかた}の くらわんか 船 寝屋
の長者とはちかつき姫 の物語 野崎 参り

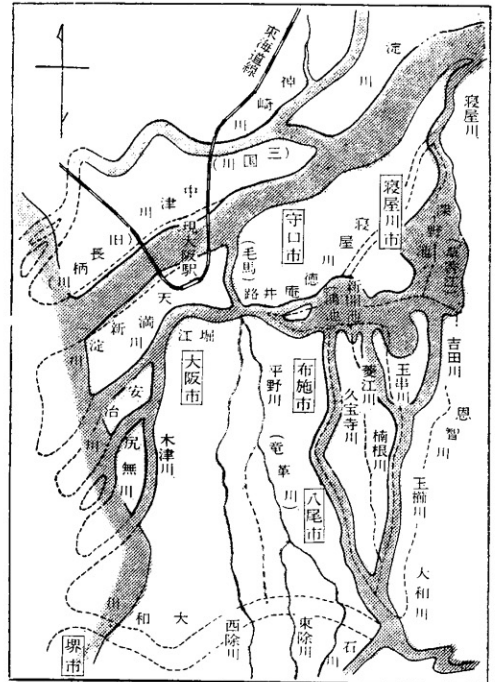
のお染久松 と伝説と民謡に富む摂津・河内の平野
が その河畔に連なっている。

高槻 茨木を過ぎると 中生層の山地は 右のほうは
るか遠くに退き 砂や泥の互層からできていて 大阪層
群と呼ばれている地層が 台地の崖に点々と姿をあらわ
している。 この地層は 第三紀の終り頃から洪積世の
はじめにかけ むかしの大阪湾に堆積したものという。

沿線にガラス張りやネオンの広告看板に飾られた沢山
な工場が並んでいる。 淀川ごしに左側はるかにみえる
のが生駒山。 この山の大阪側の斜面はいちじるしく急で
断崖をつくっているのが ほのかに車窓からもうかがわ



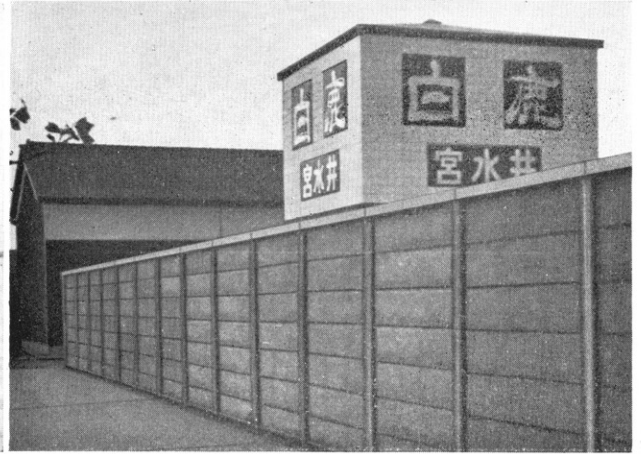
鉄道沿線にPRをかねて続々建設されている高槻付近の工場群



250年前の大阪（淀川古図から）



地盤沈下で海中に没した工場（大阪市此花区）



灘の生一本を生む宮水の水源

れよう。ますます多くなる工場の数に目を見張るうちに 新淀川の鉄橋を渡ると間もなく おおさか。

淀川三角洲の上に発達した この大きな商工の都は車窓展望の対象とするにはいささか大き過ぎる。250年前の大阪 当時の浪速のまちの地図を御覧に入れよう。

多数の河川水路の入り組みは 沼地のような土地を連想させるに違いない。事実東淀川・西淀川二つの水路の間に南北に通じていた少しばかり小高いところ — これがいまの御堂筋に当るのであるが — を通って堺の港と結ばれていたというのも さこそとうなずける。

さて 東海道線の旅はいま少し続くのである。おおさか駅を出て 再び淀川の鉄橋を渡り 神崎川を越して 尼崎に入ると 車窓これ大小の工場がずらりと並んでいる。尼崎では これらの工場群が 一斉にその用水を

地下水に求めたのが たまたま軟弱な沖積層の厚い地帯であったから たちまち土地の沈下がり 大阪湾に面した海岸では4m以上も海面下に沈んでしまったところがある。

武庫川の鉄橋を渡ると西宮 そして六甲山のふところに いただいた本邦最高級の住宅地 芦屋・住吉のあたり みかげ石の本場に近いだけに 沿線の道路はこれみな白砂。昭和9年には 六甲山の山津波に 二抱え三抱えもある巨れきが この鉄道をまたいで流れたというもの いまは全く昔の物語りとなってしまった。

六甲山脈に沿って なおも家並みはつづき 石灰分に 富んだ水と塩辛い水とが組み合わせあって いみじくも生一本を生む直接の原因となったという「灘」を過ぎるころ ようやく六甲山が右の車窓にぐっとせまって 神戸の市街地がま近なのを感じる。

(地質部)

